Ⅱ　大麦（小麦）、だいず・そば・あずき

１　麦類病害虫

麦類病害虫重点防除指導方針

大麦（小麦）は、水田営農の活性化を図る基幹作物として位置付けられている。
生産安定および品質向上を図るため、耕種的防除対策に努めるとともに、病害虫の発生動向に注意して適正な薬剤防除を推進する。

１　耕種的防除の推進

大麦（小麦）の栽培にあたり排水対策を十分に行うとともに、融雪促進を推進する。

２　主要病害虫の防除技術

種子伝染性の病害を防ぐため、健全種子への更新および種子消毒を推進する。
赤かび病の発生は、品質を低下させ商品価値をなくすので、穂揃期（開花期）とその７～１０日後の２回防除を基本とする。多発が予想される場合には、使用時期を厳守しながらもう１回の薬剤散布を実施する。

（1）大麦・小麦薬剤一覧

RPA

病害虫名		薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用濃度	使用量	使用時期	使用方法	本剤の使用回数	備考
斑葉病	播種前	ﾄﾘﾌﾐﾝ水和剤	ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ水和剤	3		種子重量の0.5%	-	は種前	種子粉衣	1回	
		ﾍﾞﾝﾚｰﾄTｺｰﾄ	ﾁｳﾗﾑ・ﾍﾞﾉﾐﾙ粉剤	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦
		ﾍﾞﾝﾚｰﾄT水和剤20	ﾁｳﾗﾑ・ﾍﾞﾉﾐﾙ水和剤	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦
						20倍		は種前	10～20分間種子浸漬	1回	
						200倍		は種前	6～24時間種子浸漬	1回	
		ﾎｰﾏｲ水和剤	ﾁｳﾗﾑ・ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ水和剤	1		種子重量の0.5～1.0%		は種前	種子粉衣	1回	麦類(小麦を除く)
						200倍		は種前	6～24時間種子浸漬	1回	麦類(小麦を除く)
						種子重量の0.5～1.0%		は種前	種子粉衣	1回	小麦
						200倍		は種前	6～24時間種子浸漬	1回	小麦
なまぐさ黒穂病	播種前	ﾄﾘﾌﾐﾝ水和剤	ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ水和剤	3		種子重量の0.5%	-	は種前	種子粉衣	1回	
		ﾍﾞﾝﾚｰﾄTｺｰﾄ	ﾁｳﾗﾑ・ﾍﾞﾉﾐﾙ粉剤	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦
		ﾍﾞﾝﾚｰﾄT水和剤20	ﾁｳﾗﾑ・ﾍﾞﾉﾐﾙ水和剤	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦
						20倍		は種前	10～20分間種子浸漬	1回	
						200倍		は種前	6～24時間種子浸漬	1回	
		ﾎｰﾏｲ水和剤	ﾁｳﾗﾑ・ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ水和剤	1		種子重量の0.5～1.0%		は種前	種子粉衣	1回	麦類(小麦を除く)
						200倍		は種前	6～24時間種子浸漬	1回	麦類(小麦を除く)
						種子重量の0.5～1.0%		は種前	種子粉衣	1回	小麦
						200倍		は種前	6～24時間種子浸漬	1回	小麦
裸黒穂病	播種前	ﾄﾘﾌﾐﾝ水和剤	ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ水和剤	3		種子重量の0.5%	-	は種前	種子粉衣	1回	麦類
		ﾍﾞﾝﾚｰﾄTｺｰﾄ	ﾁｳﾗﾑ・ﾍﾞﾉﾐﾙ粉剤	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦
		ﾍﾞﾝﾚｰﾄT水和剤20	ﾁｳﾗﾑ・ﾍﾞﾉﾐﾙ水和剤	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦
						200倍		は種前	6～24時間種子浸漬	1回	
						20倍		は種前	10～20分間種子浸漬	1回	
雲形病	播種前	ﾍﾞﾝﾚｰﾄT水和剤20	ﾁｳﾗﾑ・ﾍﾞﾉﾐﾙ水和剤	1,M3		乾燥種子重量の0.5%		は種前	種子粉衣	1回	小麦、大麦
	３月下旬～４月上旬	ﾁﾙﾄ乳剤25	ﾌﾟﾛﾋﾟｺﾅｿﾞｰﾙ乳剤	3		1000倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫21日前まで	散布	1回	大麦
雪腐病	根雪前	ﾄｯﾌﾟｼﾞﾝM水和剤	ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ水和剤	1		1000～2500倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	根雪前	散布	3回以内(出穂期以降は2回以内)	小麦
						1000～2500倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	根雪前	散布	3回以内(出穂期以降は1回以内)	麦類(小麦を除く)
うどんこ病	発生初期	ﾄｯﾌﾟｼﾞﾝM水和剤	ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ水和剤	1		1000～2000倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫30日前まで	散布	3回以内(出穂期以降は1回以内)	麦類(小麦を除く)
						1000～2000倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内(出穂期以降は2回以内)	小麦
赤かび病	１回目 開花期（穂揃期） ２回目 １回目の7～10日後	ｼﾙﾊﾞｷｭｱﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ水和剤	3		2000倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	小麦
						2000倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	大麦
						16倍	0.8ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	無人航空機による散布	2回以内	大麦
						16倍	0.8ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	小麦
		ｽﾄﾛﾋﾞｰﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ水和剤	11		2000～3000倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内	麦類(小麦を除く)
						2000～3000倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内	小麦
		ﾁﾙﾄ乳剤25	ﾌﾟﾛﾋﾟｺﾅｿﾞｰﾙ乳剤	3		8倍	800mL/10a	収穫21日前まで	無人航空機による散布	1回	大麦
						8倍	800mL/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	3回以内	小麦
						1000～2000倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫3日前まで	散布	3回以内	小麦
						1000～2000倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫21日前まで	散布	1回	大麦
		ﾄｯﾌﾟｼﾞﾝMｿﾞﾙ	ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ水和剤	1		8倍	0.8ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	無人航空機による散布	3回以内(出穂期以降は2回以内)	小麦
						8倍	0.8ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫21日前まで	無人航空機による散布	3回以内(出穂期以降は1回以内)	麦類(小麦を除く)
		ﾄｯﾌﾟｼﾞﾝM水和剤	ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ水和剤	1		1000～1500倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内(出穂期以降は2回以内)	小麦
						1000～1500倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫30日前まで	散布	3回以内(出穂期以降は1回以内)	麦類(小麦を除く)
		ﾄｯﾌﾟｼﾞﾝM粉剤DL	ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ粉剤	1		3～4kg/10a		収穫14日前まで	散布	3回以内(出穂期以降は2回以内)	小麦
						4kg/10a		収穫14日前まで	散布	3回以内(出穂期以降は1回以内)	麦類(小麦を除く)
		ﾄﾘﾌﾐﾝ水和剤	ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ水和剤	3		1000～2000倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内	
		ﾐﾗﾋﾞｽﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾋﾟｼﾞﾌﾙﾒﾄﾌｪﾝ水和剤	7		8～16倍	800mL/10a	収穫14日前まで	無人航空機による散布	2回以内	大麦
						1500～2000倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	大麦
		ﾜｰｸｱｯﾌﾟﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ水和剤	3		10～24倍	0.8ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	3回以内	
						2000～3000倍	60～150ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内	
		ﾜｰｸｱｯﾌﾟ粉剤DL	ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ粉剤	3		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内	

（２）大麦赤かび病の体系防除

大麦の赤かび病は、穂揃期（開花期）とその７～１０日後に防除するのが最も防除効果が高い。
このため、２回防除を基本とする。

〔防除体系と防除効果〕

防除体系		１回目：穂揃期（開花期）	２回目：１回目の7～10日後	防除効果
体系１	液剤＋液剤	動　　噴	動　　噴	◎
		動　　噴	無人航空機	◎
		無人航空機	無人航空機	◎
体系２	粉剤＋液剤	動　　散	動　　噴	○
		動　　散	無人航空機	○
体系３	粉剤＋粉剤	動　　散	動　　散	○

〔体系１〕

液剤（噴霧機）＋液剤（噴霧機 or 無人航空機）

１回目＝穂揃期（開花期）	散布方法
トップジンM水和剤 シルバキュアフロアブル ミラビスフロアブル	噴霧機

＋

２回目 ＝１回目防除の７～１０日後	散布方法
ストロビーフロアブル トリフミン水和剤	噴霧機
チルト乳剤２５	無人航空機

液剤（無人航空機）＋液剤（無人航空機）

１回目＝穂揃期（開花期）	散布方法
トップジンMゾル シルバキュアフロアブル ワークアップフロアブル ミラビスフロアブル	無人 航空機

＋

２回目 ＝１回目防除の７～１０日後	散布方法
チルト乳剤２５	無人航空機

〔体系２〕

粉剤（動散）　＋　液剤（噴霧機 or 無人航空機）

１回目＝穂揃期（開花期）	散布方法
トップジンM粉剤ＤＬ ワークアップ粉剤ＤＬ	動散

＋

２回目 ＝１回目防除の７～１０日後	散布方法
ストロビーフロアブル トリフミン水和剤	噴霧機
チルト乳剤２５ ミラビスフロアブル	無人航空機

〔体系３〕

粉剤（動散）＋ 粉剤（動散）

１回目＝穂揃期（開花期）	散布方法
トップジンM粉剤ＤＬ	動散

＋

２回目 ＝１回目防除の７～１０日後	散布方法
ワークアップ粉剤ＤＬ	動散

（３）麦類注意事項

なまぐさ黒穂病、裸黒穂病、雲形病

〔種子消毒〕

・浸漬薬液の量は種子容量と同等以上とし、液温は10℃以上で消毒する。

・浸漬消毒は、浸漬中に２～３回袋を上下するか種子を撹拌する。

〔耕種的防除〕

・採種圃産種子を使用する。

・発病株は、抜き取って処分する。

裸黒穂病

・黒穂株は健全株よりやや早く出穂するため、早期に抜き取り周辺株への伝染を防ぐ。

雲形病

〔耕種的防除〕

・播種期が早いと秋期の感染、発病が多くなるので、適期に播種する。

・厚撒き、窒素肥料過多で、発病が多くなる。

・発病跡地の刈り株、こぼれ麦は放置せず、地中にすき込むなどして処分する。

雪腐病

・紅色雪腐病は、排水の良い軽しょう土（火山灰土）や施肥量の少ない場合、発生しやすい。

・紅色雪腐病は、種子伝染する。

・褐色雪腐病は、排水不良など重粘土や融雪時に停滞水が多い場合に発生しやすい。

・雪腐小粒菌核病は、褐色雪腐病との併発が多い。病原力が弱く、被害は比較的少ないが、根雪の期間が長くなる山間、山沿い地帯に多い。

〔耕種的防除〕

・圃場の排水をはかる（うね立て時だけでなく、根雪前にも排水溝を整備する）。

・播種期が遅れると被害を受けやすくなるので、必ず適期に播種する。

・根雪前の窒素肥料の多用を避ける。

・前作に多発生した圃場は、作付けを避ける。

うどんこ病

・下葉から発生する。

・発病したら、早期に薬剤を散布する。

・薬剤は下葉にも十分にかかるよう散布する。

赤かび病

・出穂後、開花時に平均気温が 15℃以上で、降雨が続くとき多発する。
・本病発病麦は別仕分けを行い、食用や飼料用に使用しない。
・薬剤を選ぶ際は RAC コードを確認し、同一成分の薬剤連用は避ける。
・使用時期が「収穫 30 日前まで」の薬剤は、２回目の使用を避ける。
・トリフミン水和剤は出穂期から使用できるが、穂揃期での使用が効果的である。

株腐病

・暖冬年に発生が多い。
〔耕種的防除〕
・播種前に、消石灰などを 100～150kg/10a 施用する。
・播種期が早いと秋期の感染が多くなるため、適期に播種する。
・春の発病を減らすため、厚播きを避ける。
・発病が多い場合は、連作を避ける。
・被害麦稈を取り除く。

２　だいず・そば・あずき病害虫

だいず・そば・あずき病害虫重点防除指導方針

だいず、そば等は、大麦のあとの周年型作物として位置付けられている。
特に、そばは中山間地域等における地域特産物として生産されている。
収量・品質の高位安定化を図るため、耕種的防除対策に努めるとともに、病害虫の発生動向に注意して適正な防除を推進する。

１　耕種的防除の推進

だいず、そばの栽培にあたり、排水対策を十分に行うとともに圃場および圃場周辺の雑草の刈り取りを推進する。

２　主要病害虫の防除技術

紫斑病等種子伝染性病害を防ぐため、健全種子への更新および種子消毒を推進する。
葉焼病、ウコンノメイガは発生状況を確認し、遅れずに防除（臨機）を行う。
カメムシ類、シロイチモジマダラメイガ、フタスジヒメハムシを防除するため、子実肥大期を中心に３回（基幹）防除を推進する。

（１） だいず病害虫の要防除水準

カメムシ類の要防除水準

圃場内での調査を行い、カメムシ類の発生状況を的確に把握した上で、要防除水準に基づく効率的な防除を実施し、環境負荷の少ない防除を推進する。

１　要防除水準

８月下旬（圃場侵入期）は 100 茎あたり 0.3 頭以上、９月中旬（発生最盛期）は 100 茎あたり 4.0 頭以上の場合は防除する。

２　調査方法

８月下旬と９月中旬に、１圃場あたり 100 茎ずつ３か所の見とり調査を行う。

フタスジヒメハムシの要防除水準

１　要防除水準

８月下旬（第２世代成虫発生最盛期）に払い落としを行い、1.5m、２条当たり約 70 頭以上の場合は直ちに防除する。

２　調査方法

長さ 150 ㎝、幅 80 ㎝の払い落とし用シートを条間に広げてシートの両端から２人で両側の株をたたき、成虫をシート上に落とす。１圃場につき、３か所行う。

葉焼病の要防除水準

１　要防除水準

開花期に発病葉率 16.5%以上は、ただちに防除する。

２　調査方法

開花期に圃場内で発生が多い場所を選び、10 株以上の全葉数および発病葉数を調べ、発病葉率を求める。

（２）だいず薬剤一覧

RPA

病害虫名	防除時期	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用濃度	使用量	使用時期	使用方法	本剤の使用回数	備考
紫斑病	播種前	ｷﾋｹﾞﾝR-2ﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾁｳﾗﾑ水和剤	M3		乾燥種子1kg当り原液20mL		は種前	塗沫処理	1回	
		ｸﾙｰｻﾞ－MAXX	ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ・ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ・ﾒﾀﾗｷｼﾙM水和剤	4A,12,4		原液	乾燥種子1kg当り8mL	は種前	塗沫処理	1回	
	開花後20～30日	ｱﾐｽﾀｰ20ﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ水和剤	11		2000～3000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ｹﾞｯﾀｰ水和剤	ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ・ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ水和剤	1,10		1000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	3回以内	
		ﾌｧﾝﾀｼﾞｽﾀﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ水和剤	11		1000～2000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内	
						16倍	0.8ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	3回以内	
		ｱﾐｽﾀｰﾄﾚﾎﾞﾝSE	ｴﾄﾌｪﾝﾌﾞﾛｯｸｽ・ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ水和剤	3A,11		1000倍	100～400ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	
						8倍	800mL/10a	収穫21日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
		ﾄﾗｲﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾃﾌﾞﾌﾛｷﾝ水和剤	U16		1000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	
						8倍	0.8ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
	開花期後15～30日	Zﾎﾞﾙﾄﾞｰ粉剤DL	銅粉剤	M1		3kg/10a		-	散布	-	
葉焼病	初発時（7月下旬頃）	ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙC水和剤	ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ・銅水和剤	M1,40		600倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内	
茎疫病	播種前	ｸﾙｰｻﾞ－MAXX	ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ・ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ・ﾒﾀﾗｷｼﾙM水和剤	4A,12,4		原液	乾燥種子1kg当り8mL	は種前	塗沫処理	1回	
ｱﾌﾞﾗﾑｼ類	播種前	ｸﾙｰｻﾞ－FS30	ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ水和剤	4A		乾燥種子1kg当り原液6mL		は種前	塗沫処理	1回	
		ｸﾙｰｻﾞ－MAXX	ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ・ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ・ﾒﾀﾗｷｼﾙM水和剤	4A,12,4		原液	乾燥種子1kg当り8mL	は種前	塗沫処理	1回	
	生育期	ﾏﾗｿﾝ乳剤	ﾏﾗｿﾝ乳剤	1B		2000～3000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内	
		ﾏﾗｿﾝ粉剤3	ﾏﾗｿﾝ粉剤	1B		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内	
ﾀﾈﾊﾞｴ	播種前	ｸﾙｰｻﾞ－FS30	ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ水和剤	4A		乾燥種子1kg当り原液6mL		は種前	塗沫処理	1回	
		ｸﾙｰｻﾞ－MAXX	ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ・ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ・ﾒﾀﾗｷｼﾙM水和剤	4A,12,4		原液	乾燥種子1kg当り8mL	は種前	塗沫処理	1回	
ﾈｷﾘﾑｼ類	播種前	ｸﾙｰｻﾞ－FS30	ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ水和剤	4A		乾燥種子1kg当り原液6mL		は種前	塗沫処理	1回	
		ｸﾙｰｻﾞ－MAXX	ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ・ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ・ﾒﾀﾗｷｼﾙM水和剤	4A,12,4		原液	乾燥種子1kg当り8mL	は種前	塗沫処理	1回	
ｶﾒﾑｼ類	若莢～子実肥大期８～９月	ｱﾙﾊﾞﾘﾝ粉剤DL	ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ粉剤	4A		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ｴﾙｻﾝ乳剤	PAP乳剤	1B	劇	1000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ｶｽｹｰﾄﾞ乳剤	ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ乳剤	15		4000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
						32倍	0.8ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
		ｽﾀｰｸﾙ液剤10	ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ液剤	4A		1000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
						8倍	0.8ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	空中散布	2回以内	
						8倍	0.8ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
		ｽﾀｰｸﾙ粉剤DL	ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ粉剤	4A		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ｽﾐﾁｵﾝ粉剤3DL	MEP粉剤	1B		4kg/10a		収穫21日前まで	散布	4回以内	
		ﾀﾞﾝﾄﾂH粉剤DL	ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ粉剤	4A		3～4kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内	
		ﾄﾚﾎﾞﾝ乳剤	ｴﾄﾌｪﾝﾌﾞﾛｯｸｽ乳剤	3A		1000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	
		ﾄﾚﾎﾞﾝ粉剤DL	ｴﾄﾌｪﾝﾌﾞﾛｯｸｽ粉剤	3A		-	4kg/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	豆類(種実)
		ｱﾐｽﾀｰﾄﾚﾎﾞﾝSE	ｴﾄﾌｪﾝﾌﾞﾛｯｸｽ・ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ水和剤	3A,11		1000倍	100～400ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	
						8倍	800mL/10a	収穫21日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
	若莢～子実肥大期　８月	ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ粒剤5	ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ粒剤	1B		4～6kg/10a		収穫30日前まで	散布	4回以内	
		ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗSC	ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾙﾌｪﾇﾛﾝ水和剤	28,15		10000～12000倍	100～300L/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
						40～80倍	0.8L/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
ｼﾛｲﾁﾓｼﾞﾏﾀﾞﾗﾒｲｶﾞ	若莢伸長期	ｴﾙｻﾝ乳剤	PAP乳剤	1B	劇	1500～2000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ粒剤5	ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ粒剤	1B		4～6kg/10a		収穫30日前まで	散布	4回以内	
		ﾄﾚﾎﾞﾝ乳剤	ｴﾄﾌｪﾝﾌﾞﾛｯｸｽ乳剤	3A		1000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	
		ﾊﾟｰﾏﾁｵﾝ水和剤	ﾌｪﾝﾊﾞﾚﾚｰﾄ・MEP水和剤	1B,3A	劇	1000～2000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫21日前まで	散布	3回以内	
		ﾄﾚﾎﾞﾝ粉剤DL	ｴﾄﾌｪﾝﾌﾞﾛｯｸｽ粉剤	3A		-	4kg/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	豆類(種実)
ﾏﾒｼﾝｸｲｶﾞ	子実肥大初期８月	ｴﾙｻﾝ乳剤	PAP乳剤	1B	劇	1000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗSC	ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾙﾌｪﾇﾛﾝ水和剤	28,15		10000～12000倍	100～300L/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
						40～80倍	0.8L/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	

病害虫名	防除時期	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用濃度	使用量	使用時期	使用方法	本剤の使用回数	備考
ﾀﾞｲｽﾞｻﾔﾀﾏﾊﾞｴ	開花終期～子実肥大初期 ８月上旬～中旬	ｽﾐﾁｵﾝ乳剤	MEP乳剤	1B		8倍	800mL/10a	収穫21日前まで	無人航空機による散布	4回以内	
						1000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫21日前まで	散布	4回以内	
		ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ粒剤5	ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ粒剤	1B		4～6kg/10a		収穫30日前まで	散布	4回以内	
ｳｺﾝﾉﾒｲｶﾞ	７月下旬～８月はじめ	ﾀﾞﾝﾄﾂH粉剤DL	ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ粉剤	4A		4kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内	
		ﾌﾟﾚﾊﾞｿﾝﾌﾛｱﾌﾞﾙ5	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ水和剤	28		4000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
						16～32倍	0.8ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
		ﾖｰﾊﾞﾙﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ水和剤	28		5000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
						50倍	1.6ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ	生育期 若齢幼虫期	ｴﾙｻﾝ乳剤	PAP乳剤	1B	劇	1000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ﾄﾚﾎﾞﾝ乳剤	ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ乳剤	3A		1000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	
		ﾄﾚﾎﾞﾝ粉剤DL	ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ粉剤	3A		-	4kg/10a	収穫14日前まで	散布	2回以内	豆類(種実)
		ﾌﾟﾚﾊﾞｿﾝﾌﾛｱﾌﾞﾙ5	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ水和剤	28		16～32倍	0.8ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	無人航空機による散布	2回以内	
						4000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ﾍﾞﾈﾋﾞｱOD	ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ水和剤	28		2000～4000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内	
		ﾏﾄﾘｯｸﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ水和剤	18		2000～3000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫前日まで	散布	3回以内	
						8～16倍	800mL/10a	収穫前日まで	無人航空機による散布	3回以内	
ﾊﾀﾞﾆ類	生育期	ﾏﾗｿﾝ粉剤3	ﾏﾗｿﾝ粉剤	1B		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内	
ﾌﾀｽｼﾞﾋﾒﾊﾑｼ	播種前	ｸﾙｰｻﾞ－FS30	ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ水和剤	4A		乾燥種子1kg当り原液6mL		は種前	塗沫処理	1回	
		ｸﾙｰｻﾞ－MAXX	ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ・ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ・ﾒﾀﾗｷｼﾙM水和剤	4A,12,4		原液	乾燥種子1kg当り8mL	は種前	塗沫処理	1回	
	８月下旬 第２世代発生期	ｱｸﾞﾛｽﾘﾝ乳剤	ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ乳剤	3A	劇	2000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内	
		ｱﾙﾊﾞﾘﾝ粉剤DL	ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ粉剤	4A		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ｽﾀｰｸﾙ液剤10	ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ液剤	4A		1000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ｽﾀｰｸﾙ粉剤DL	ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ粉剤	4A		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	2回以内	
		ﾀﾞﾝﾄﾂH粉剤DL	ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ粉剤	4A		3～4kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内	

（３）だいず注意事項

紫斑病

・子実肥大期に雨が多いと多発する。
・種子伝染するので、優良種子を使用しクルーザーＭＡＸＸによる種子消毒を行う。
・耐性菌が発生している。
・耐性菌の発生を抑制するために、系統の異なる２剤を選択し、開花後 20 日目とその 10 日後（開花後 30 日目）に体系で散布する。
・アミスター20 フロアブルは、開花後２０～３０日目の１回散布でも効果がある。

葉焼病

・初発時に効果の高いフェスティバルＣ水和剤を施用し、病害の蔓延を防ぐ。
・発生が多いほど小粒比率が高くなり、減収する。
・里のほほえみで発生が多い。

黒根腐病

・排水不良田での発生が多く、一度発生すると根絶することが困難。
・立枯れした株を抜くとゴボウ根になっており、手応え無く抜ける。株元に赤い子嚢殻が発生することがあり、発生が広がると減収する。
・発生した圃場は 3 年以上水稲を作付けし、菌の密度を下げる。

カメムシ

・8 月 20 日頃と 9 月 10 日頃の２回防除すると効果が高い。
〔耕種的防除〕
・圃場周辺を除草する。

ダイズサヤタマバエ

・山間、山沿いで発生が多い。

ウコンノメイガ

・葉が巻きはじめる若齢幼虫期に防除する。
・山間、山沿いで発生が多い。

ハスモンヨトウ

・早期発見に努め、早めに防除する。
・白変葉が見え始めた時に、分散前に防除する。

（4）そば薬剤一覧

RPA

病害虫名	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用濃度	使用量	使用時期	使用方法	本剤の使用回数
ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ	ｾﾞﾝﾀｰﾘ顆粒水和剤	BT水和剤	11A		2000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	発生初期 但し､収穫前日まで	散布	-
	ﾛﾑﾀﾞﾝﾌﾛｱﾌﾞﾙ	ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ水和剤	18		2000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫21日前まで	散布	2回以内
	ﾛﾑﾀﾞﾝ粉剤DL	ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ粉剤	18		4kg/10a		収穫21日前まで	散布	2回以内
ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ雄成虫	ﾌｪﾛﾃﾞｨﾝSL	ﾘﾄﾙｱ剤				2～4個/ha	成虫発生初期から発生終期まで	本剤をﾄﾗｯﾌﾟ1台当り1個を取付けて配置する。取付けた薬剤は1.5～2ヵ月間隔で更新する。	

（5）あずき薬剤一覧

RPA

病害虫名	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用濃度	使用量	使用時期	使用方法	本剤の使用回数
ｱｽﾞｷﾉﾒｲｶﾞ	ｴﾙｻﾝ乳剤	PAP乳剤	1B	劇	1000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	2回以内
ｱﾌﾞﾗﾑｼ類	ﾏﾗｿﾝ乳剤	ﾏﾗｿﾝ乳剤	1B		1000～3000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内
	ﾏﾗｿﾝ粉剤3	ﾏﾗｿﾝ粉剤	1B		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内
ﾊﾀﾞﾆ類	ﾏﾗｿﾝ乳剤	ﾏﾗｿﾝ乳剤	1B		1000～3000倍	100～300ﾘｯﾄﾙ/10a	収穫7日前まで	散布	3回以内
	ﾏﾗｿﾝ粉剤3	ﾏﾗｿﾝ粉剤	1B		3kg/10a		収穫7日前まで	散布	3回以内

３　大麦（小麦）、だいず、そば除草剤

（１）使用上の注意事項

畑作では水田作に比べて効果の幅が大きいので、使用する場合は圃場条件の確保、気象条件、各薬剤の作用特性などを十分に配慮する。

①　は種後の土壌処理については、砂質土、低湿地などでは薬害が生じるほか殺草効果も劣るので使用を避ける（薬剤によっては、適用土壌が「壌土～埴土」となっているものもあるので注意する）。

②　土壌処理剤は、覆土後、雑草の発生期前までに、土壌表面に均一散布する。

③　土壌処理の場合、砕土率を高めて覆土はやや厚めとする。
　また、は種は浅まきとならないように注意する（薬害防止のため）。

④　薬剤の土壌表面処理の場合、薬剤が土中深く入り、作物の種子や根に直接薬剤が作用することがないように十分注意する。

⑤　土壌が乾燥して極端に水分の少ない場合は効果が劣るので、散布水量を多めにしたり（薬剤使用量は基準どおり）降雨後に散布する。

⑥　処理直後に激しい降雨にあうと薬害が発生し出芽および根その他の生育を抑えるので、処理後１～２日間は降雨にあわないよう天気予報等に注意し散布する。

⑦　排水不良田では薬害が生ずるおそれがあるため、使用を避ける。

⑧　生育期処理は、作物の生育を考慮して雑草発生～初期に散布する。
　散布の際に、付近の作物にかからないよう注意する。

（２）使用方法

作物名	使用時期	除草剤名	使用回数	10アール当たり使用量	使用方法	注意事項
大麦（小麦）	は種直後（雑草発生前）	クリアターン細粒剤F ベンチオカーブ 8.0% ペンディメタリン 0.80% リニュロン 1.2%	1 (1) (1) (1)	全面土壌散布 4～5kg	土壌全面均一に散布する。	・対象雑草は1年生雑草。ただし、トレファノサイド乳剤、トレファノサイド粒剤2.5はツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く。 ・サターンバアロの適用土壌は、壌土～埴土である。 ・散播栽培等覆土を行わない場合は散布しない。 ・砂土、わらだけの覆土、芽だしまきのときは散布を行わない。 ・覆土が浅いと薬害が出やすいので、覆土は細かく砕き、やや厚めとする。 ・(トレファノサイド乳剤)
	は種直後（雑草発生前）	クリアターン乳剤 ベンチオカーブ 50% ペンディメタリン 5% リニュロン 7.5%	1 (1) (1) (1)	全面土壌散布 500～700mℓ	70～100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
	は種後～発芽前（雑草発生前）	サターンバアロ粒剤 ベンチオカーブ 8% プロメトリン 0.8%	1 (1) (2)	全面土壌散布 3～5kg	土壌全面均一に散布する。	
	は種直後～麦出芽前	サターンバアロ乳剤 ベンチオカーブ 50% プロメトリン 5%	1 (1) (2)	全面土壌散布 500～750mℓ	70～100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
	は種後出芽前	トレファノサイド粒剤2.5 トリフルラリン 2.5%	2 (2)	全面土壌散布 4～5kg	土壌全面均一に散布する。	
	は種後出芽前（雑草発生前）	トレファノサイド乳剤 トリフルラリン44.5%	2 (2)	全面土壌散布 200～300mℓ	100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
	は種後出芽前（雑草発生前）	キックボクサー細粒剤F プロスルホカルブ 7% リニュロン 1.75%	1 (2) (1)	全面土壌散布 3～4kg	土壌全面均一に散布する。	
	は種後出芽前（雑草発生前）	ムギレンジャー乳剤 プロスルホカルブ46% リニュロン11.5%	1 (2) (1)	全面土壌散布 300～600mℓ	50～100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	

作物名	使用時期	除草剤名	使用回数	10アール当たり使用量	使用方法	注意事項
大麦（小麦）	は種後出芽前～出芽揃期（雑草発生前）	バンバン細粒剤F エスプロカルブ6.0% ジフルフェニカン0.15%	1 (1) (1)	全面土壌散布 3～5kg	土壌全面均一に散布する。	・対象雑草は1年生雑草。 ・その他注意事項は前頁参照。 ・砂土を除く。
	は種後出芽前（雑草発生前）	バンバン乳剤 エスプロカルブ60% ジフルフェニカン1.5%	1 (1) (1)	全面土壌散布 300～500 mℓ	100 ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
	は種後出芽前（雑草発生前）	ガレース乳剤 ジフルフェニカン 3.7% トリフルラリン 37%	1 (1) (2)	全面土壌散布 200～250mℓ	100 ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	
	は種後発芽前（雑草発生前） または 麦1～2葉期（雑草発生前～発生始期）	ガレースG ジフルフェニカン 0.15% トリフルラリン 2%	1 (1) (2)	全面土壌散布 4～5 kg	土壌全面均一に散布する。	・対象雑草は畑地1年生雑草。 ・その他注意事項は前頁参照。 ・砂土を除く。
	生育期処理は種後～麦2(小麦4)葉期（雑草発生前～発生始期）	ボクサー プロスルホカルブ 78.4%	2 (2)	雑草茎葉散布 又は 全面土壌散布 400～500mℓ	70～100 ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	・対象雑草は1年生雑草。 ・その他注意事項は前頁参照。
	生育期処理は種後～麦2葉期（雑草発生前～イネ科雑草1葉期まで）	リベレーターG ジフルフェニカン 0.2% フルフェナセット 0.6%	1 (1) (1)	全面土壌散布 4～5 kg	土壌全面均一に散布する。	・対象雑草は1年生雑草。 ・砂土を除く。
	生育期処理は種後～麦3葉期（雑草発生前～発生始期）	ハーモニー細粒剤F チフェンスルフロンメチル 0.15%	1 (1)	全面土壌散布 4～5 kg	土壌全面均一に散布する。	・対象雑草は1年生広葉雑草およびスズメノテッポウ。 ・砕土、整地、覆土を丁寧に行い、均一に散布する。 ・発生前から発生始期のスズメノテッポウや多くの一年生雑草に優れた除草効果を発揮する。 ・周辺の作物に飛散する恐れがある場合は散布しない。 ・砂土を除く。
	生育期処理は種後～麦3葉期（雑草発生前～イネ科雑草1葉期まで）	リベレーターフロアブル ジフルフェニカン 8.4% フルフェナセット 33.6%	1 (1) (1)	雑草茎葉散布 又は全面土壌散布 60～80 mℓ	100 ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	・対象雑草は1年生雑草。 ・砂土を除く。

作物名	使用時期	除　草　剤　名	使用回数	10アール当たり使用量	使用方法	注意事項
大　麦（小麦）	生育期処理は種後～節間伸長前（但し、スズメノテッポウ5葉期まで）	ハーモニー75DF水和剤 チフェンスルフロンメチル 75%	1 (1)	雑草茎葉散布 又は 全面土壌散布 5～10g	50～100ℓの水に溶かして全面均一に散布する。	・対象雑草は1年生広葉雑草およびスズメノテッポウ。 ・生育期のスズメノテッポウや多くの一年生広葉雑草に優れた除草効果を発揮する。 ・周辺の作物に飛散する恐れがある場合は散布しない（ドリフトレスノズルの使用が望ましい）。 ・タンク及び使用器具は使用後すみやかに消石灰を用いて洗浄する。
	穂ばらみ期まで（雑草生育初期）	アクチノール乳剤 アイオキシニル 30.0%	2 (2)	雑草茎葉散布 100～200mℓ	70～100ℓの水に希釈して散布する。	・対象雑草は畑地一年生雑草

※使用回数については農薬の使用回数、および成分毎の使用回数（成分名の記載と同じ行に記載される括弧書きの数字）を記載した。

作物名	使用時期	除草剤名	使用回数	10アール当たり使用量	使用方法	注意事項
だいず	は種直後(雑草発生前)	クリアターン細粒剤F ベンチオカーブ 8% ペンディメタリン 0.8% リニュロン 1.2%	1 (1) (1) (2)	全面土壌散布 4～5 kg	土壌全面均一に散布する。	・対象雑草は1年生雑草。また、トレファノサイド乳剤および同粒剤2.5はツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く。 ・覆土は細かく砕いた土を用い3㎝位丁寧に行い、土壌表面をなるべく均平にする。 ・散布直後に多量の降雨が予想される場合は散布を延期する。 ・土壌が極端に乾燥していると効果が劣るので散布水量を多めにするか降雨後に散布する。 ・直径2㎝以下の土塊重量が全体の60%以上になるよう砕土する。 ・雑草発生前(は種後日数を置かない)に土壌表面にムラなく均一に散布する。 ・粒剤は乳剤よりも効果が変動するので注意する。 ・カブレ(トレファノサイド乳剤、プロールプラス乳剤) ・エコトップP細粒剤F、エコトップ P 乳剤、プロールプラス乳剤は砂土を除く全土壌。
		クリアターン乳剤 ベンチオカーブ 50% ペンディメタリン 5% リニュロン 7.5%	1 (1) (1) (2)	全面土壌散布 500～800mℓ	70～100 ℓ の水に溶かして全面均一に散布する。	
	は種後～出芽前(雑草発生前)	サターンバアロ粒剤 ベンチオカーブ 8% プロメトリン 0.8%	1 (1) (1)	全面土壌散布 4～6 kg	土壌全面均一に散布する。	
	は種後出芽前	サターンバアロ乳剤 ベンチオカーブ 50% プロメトリン 5%	1 (1) (1)	全面土壌散布 600～1000 mℓ	70～100 ℓ の水に溶かして全面均一に散布する。	
		トレファノサイド粒剤2.5 トリフルラリン 2.5%	1 (2)	全面土壌散布 4～6 kg	土壌全面均一に散布する。	
		トレファノサイド乳剤 トリフルラリン 44.5%	1 (2)	全面土壌散布 200～300mℓ	100 ℓ の水に溶かして全面均一に散布する。	
	は種後出芽前(雑草発生前)	エコトップP細粒剤F ジメテナミドP 1% リニュロン 1.4%	1 (1) (2)	全面土壌散布 4～6 kg	土壌全面均一に散布する。	
		エコトップP乳剤 ジメテナミドP 8.5% リニュロン 12%	1 (1) (2)	全面土壌散布 400～600mℓ	100 ℓ の水に溶かして全面均一に散布する。	
		プロールプラス乳剤 ジメテナミド P 6.7% ペンディメタリン 6.5% リニュロン 11.4%	1 (1) (1) (2)	全面土壌散布 400～600mℓ	70～150 ℓ の水に溶かして全面均一に散布する。	
		フルミオWDG フルミオキサジン 50%	1 (1)	土壌全面散布 5～10g	100 ℓ の水に溶かして全面均一に散布する。	・散布後は散布器のタンクやホース・ノズル十分に洗浄する。 ・対象雑草は1年生広葉雑草
	出芽直前～3葉期まで(雑草発生始期～2葉期)	パワーガイザー液剤 イマザモックスアンモニウム塩 0.85%	1 (2)	雑草茎葉散布又は全面土壌散布 200～300mℓ	100 ℓ の水に溶かして全面均一に散布する。	・前処理として土壌処理剤を使用。 ・砂土では使用しない。 ・展着剤を加用しない。 ・周辺作物に影響を与える可能性があるので飛散に注意する。

作物名	使用時期	除草剤名	使用回数	10アール当たり使用量	使用方法	注意事項
だいず	雑草生育期 イネ科雑草 3～5葉期 (収穫60日前まで)	ワンサイドP乳剤 フルアジホップP 17.5%	1 (1)	雑草茎葉散布 75～100mℓ	25～100ℓの水に溶かして散布する。	・対象雑草は一年生イネ科雑草(スズメノカタビラを除く)。 ・ワンサイドP乳剤はシバムギ、レッドトップにも登録がある。 ・イネ科雑草に優れた効果があるが、広葉雑草およびカヤツリグサには効果がない。 ・遅効性のため、枯殺するまで日数を要する。 ・周辺のイネ科作物にかからないように散布する。
	雑草生育期 イネ科雑草 3～5葉期 (収穫30日前まで)	ナブ乳剤 セトキシジム 20%	1 (1)	雑草茎葉散布 150～200mℓ	100～150ℓの水に溶かして散布する。	
	雑草生育期 イネ科雑草 6～8葉期 (収穫30日前まで)			雑草茎葉散布 200mℓ	100ℓの水に溶かして散布する。	
	耕起前または出芽前まで	ラウンドアップマックスロード グリホサートカリウム塩 48%	2 (4)	雑草茎葉散布 200～500mℓ	50～100ℓの水に溶かして散布する。	・対象は1年生雑草。
	雑草生育期:畦間処理収穫前日まで		2 (4)	200～500mℓ		
	雑草生育期 落葉終期～収穫14日前まで		1 (4)	雑草茎葉散布 500mℓ		
	雑草生育期 イネ科雑草 3～10葉期 (収穫30日前まで)	ポルトフロアブル キザロホップエチル 7%	1 (1)	雑草茎葉散布 または 全面散布 200～300mℓ	50～100ℓの水に溶かして散布する。	・対象雑草は一年生イネ科雑草(スズメノカタビラを除く)。
	雑草生育初期～6葉期 (大豆2葉期～開花前まで) (収穫45日前まで)	大豆バサグラン液剤 (ナトリウム塩) ベンタゾン 40%	1 (2)	雑草茎葉散布 100～150mℓ	100ℓの水に溶かして散布する。	・対象雑草は1年生雑草(イネ科を除く) ・広葉雑草に効果を示すが，効果がない雑草草種もあるので注意する。(3)-1参照。 ・大豆に薬害が生じる場合があるので(3)-1 注意事項を遵守する。
	本葉2葉期～開花前 (雑草生育期) (収穫45日前まで)	アタックショット乳剤 フルチアセットメチル 2.0%	1 (1)	雑草茎葉散布 または 全面散布 30～50mℓ	100ℓの水に溶かして散布する。	・土壌処理剤との体系で使用する。 ・他の除草剤との混用、展着剤の加用はしない。 ・処理後6時間以内の降雨があると効果が劣る場合があるので注意する。

作物名	使用時期	除草剤名	使用回数	10アール当たり使用量	使用方法	注意事項
だいず	大豆本葉3葉期以降雑草生育期(収穫30日前まで)	ロロックス リニュロン 50%	1 (1)	雑草茎葉兼土壌散布(畦間・株間処理) 100～200g	70～150ℓの水に溶かして散布する。	・対象雑草は一年生雑草。 ・専用ノズルを使用し、噴口をなるべく低くして作物の葉にかからないようにする(作物の成長点付近に薬剤を付着させない)。 ・イネ科雑草には効果が劣る場合がある。
	雑草生育期・は種後出芽前・畦間処理(収穫28日前まで)	バスタ液剤 グルホシネート 18.5%	3 (3)	雑草茎葉散布 300～500mℓ	100～150ℓの水に溶かして散布する。	・対象雑草は一年生雑草。 ・作物に飛散しないようになるべくドリフトレスノズルを使用し、雑草の茎葉全体に付着するように散布する。 ・風のない日に散布する。
	雑草生育期畦間処理(収穫28日前まで)	ザクサ液剤 グルホシネートPナトリウム塩 11.5%	3 (3)	雑草茎葉散布 300～500mℓ	100～150ℓの水に溶かして散布する。	・対象雑草は一年生雑草。 ・作物に飛散しないようになるべくドリフトレスノズルを使用し、雑草の茎葉全体に付着するように散布する。 ・風のない日に散布する。
	雑草生育期畦間処理(本葉5葉期以降)(収穫30日前まで)	ダイロンゾル DOMU 50%	1 (1)	雑草茎葉散布又は全面土壌散布 100～200mℓ	100ℓの水に溶かして散布する。	・対象雑草は一年生雑草。 ・作物に飛散しないようになるべくドリフトレスノズルを使用し、雑草の茎葉全体に付着するように散布する。 ・風のない日に散布する。
	雑草生育期畦間処理(雑草の草丈30cm以下)(収穫3日前まで)	プリグロックスL ジクワット 7% パラコート 5%	4 (4) (4)	雑草茎葉散布 600～1000mℓ	100～150ℓの水に溶かして散布する。	・対象雑草は一年生雑草。 ・作物に飛散させない。 ・毒物。

※ 使用回数については農薬の使用回数、および成分毎の使用回数(成分名の記載と同じ行に記載される括弧書きの数字)を記載した

作物名	使用時期	除草剤名	使用回数	10アール当たり使用量	使用方法	注意事項
そば	播種前 (雑草生育期)	ザクサ液剤 グルホシネートPナトリウム塩 11.5%	3 (3)	300～500mℓ	100～150ℓの水に溶かして散布する(雑草茎葉散布)。	・対象雑草は一年生雑草。 ・養魚田およびその付近では使用しない。
	耕起前または播種前 (雑草生育期)	ラウンドアップマックスロード グリホサートカリウム塩 48%	2 (2)	200～500mℓ	50～100ℓの水に溶かして散布する(雑草茎葉散布)。	・対象雑草は一年生および多年生雑草。 ・散布後2時間以内に降雨が予想される場合は散布を見合わせる。 ・専用ノズルを使用する。 ・排水溝および排水溝まで飛散する恐れがある所では使用しない。 ・養魚田およびその付近では使用しない。 ・眼に入らないよう注意する。 ・皮膚に付着しないよう注意する。

※使用回数については農薬の使用回数、および成分毎の使用回数(成分名の記載と同じ行に記載される括弧書きの数字)を記載した。

（３）大豆バサグラン液剤の使用について

①　使用方法

作物名	対象雑草名	使用時期	除草剤名	10アール当たり使用量	使用方法	使用回数
だいず	一年生雑草（イネ科を除く）	一年生広葉雑草の生育初期～6葉期（ダイズの2葉期～開花前まで、但し収穫45日前まで）	大豆バサグラン液剤(Na塩) ベンタゾン　40%	100～150mℓ	100ℓの水に溶かして散布する（雑草茎葉散布）。	1回

②　使用上の注意事項

だいずの除草対策は、は種覆土直後の除草剤散布と中耕・培土２回による雑草の発生抑制を基本とする。

中耕・培土が適正に実施できず畑地一年生広葉雑草が問題となる圃場で、開花前の早い時期に散布する。

ア　だいずの品種によっては薬害（葉に斑点、色抜け、黄変、縮葉症状等の一過性のもの）により減収する場合があるので、本剤の使用にあたっては指導機関に相談するなど十分注意する。また、使用者の責任において事前に使用品種における薬害の程度を十分確認してから使用する。

イ　適用雑草は一年生広葉雑草であるが、アカザ科、ヒユ科、トウダイグサ科の雑草には効果が劣る。

ウ　本県では、「エンレイ」および「里のほほえみ」に使用可能である。「あやこがね」は薬害が強く出ることがあるため使用を避ける。

エ　除草効果を高め、薬害の発生および助長を防ぐため、薬液が雑草全体によく付着し、だいずへの付着量が極力少なくなるように散布する。また、薬害を助長するので重複散布はしない。

オ　①著しい高温が続く場合、②日射が強く蒸散が盛んな場合、③低温、湿害、肥料不足等によりだいずが生育不良の場合は薬害を助長することがあるので、使用を避ける。

カ　降雨後の土壌が湿潤な状態（溝に停滞水がある）で散布すると、散布薬剤がだいずに吸収され、株全体が黄化等の薬害を起すため、このような状態では使用を避ける。

キ　他剤との混用は避ける。

ク　散布後、曇天、降雨日が長く続くと効果が劣ることがあるので留意する。

ケ　周辺作物にかからないように注意する。

コ　本剤を使用した場合は、えだまめ用途としない（えだまめでは登録がない）。

（４）ラウンドアップマックスロード（だいずの落葉終期）の使用について

1)　落葉終期とは、だいずの葉の大部分が落葉した時期とする。

2)　薬液がだいずにかからないように散布する。

3)　水分含量の高い果実をつけた雑草では、茎葉が枯れても果実が残る場合があり、汚損粒の原因となるので収穫前に除去等を行うこと。また、雑草の茎水分含量が高い場合も汚損粒の原因になるので、収穫前に除去等を行うこと。

4)　気温が低下する条件での処理であり、効果の完成まで 2 週間以上の期間を要するので、収穫時期は処理後 3 週間を目安とする。

（５）大麦（小麦）の圃場内の周縁部における除草剤使用について

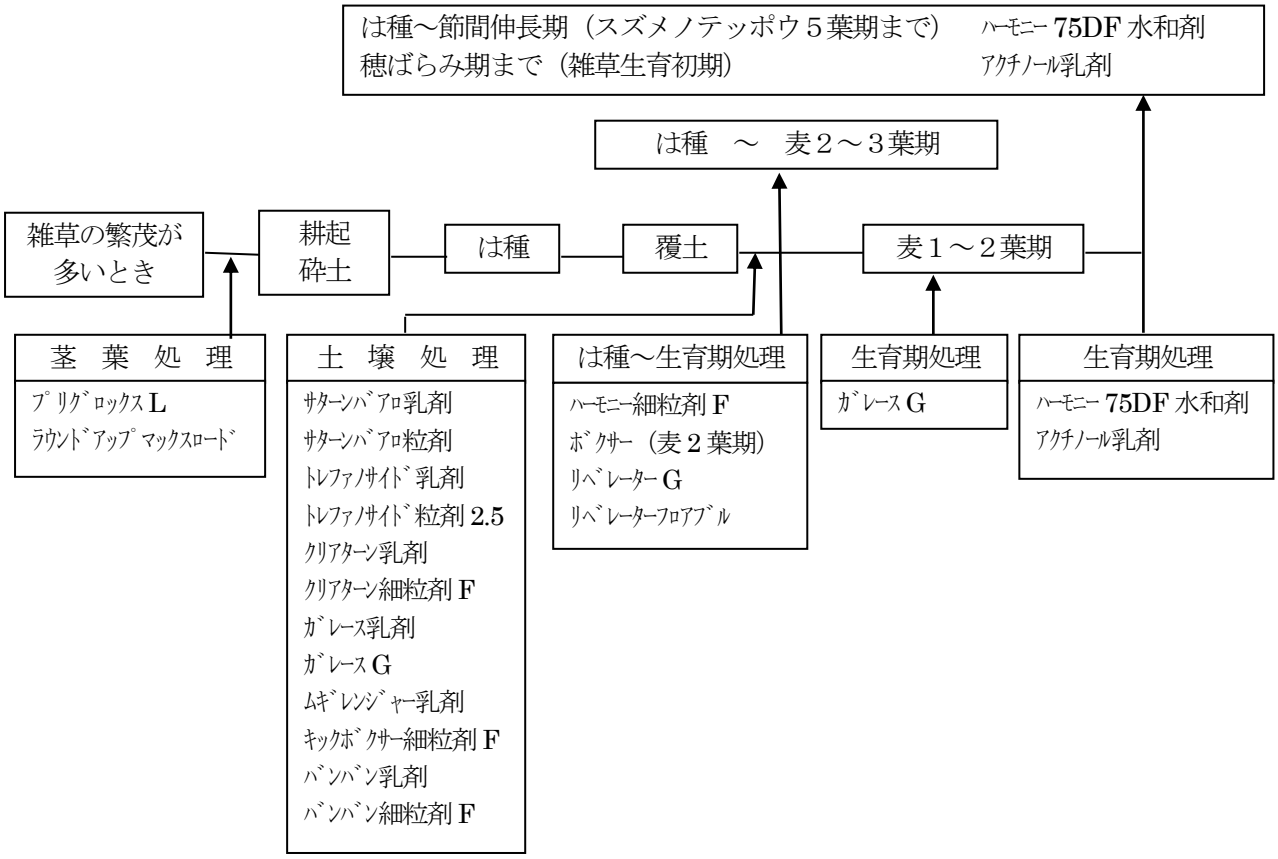
「圃場内の周縁部」とは、圃場内であって作物が植えられていない周縁部分を示す。排水溝内に農薬を散布すると水を介して河川等へ飛散、流入する可能性がある場合は、排水溝内への散布は控える。

（６）水田転換畑の麦類・だいず等の畦畔で除草剤を使用する際の注意点

除草剤の中で適用場所が「水田畦畔」と限定されているものについては、その水田で「水稲」が栽培されている場合に限って使用できる。麦類・だいず等の水稲以外の作物が栽培されている水田の畦畔には、「水田畦畔」で登録がある除草剤でも使用できない。水田畦畔には、水田で栽培されている作物（麦類やだいず）に適用がある除草剤を、登録内容を遵守して使用しなければならない。

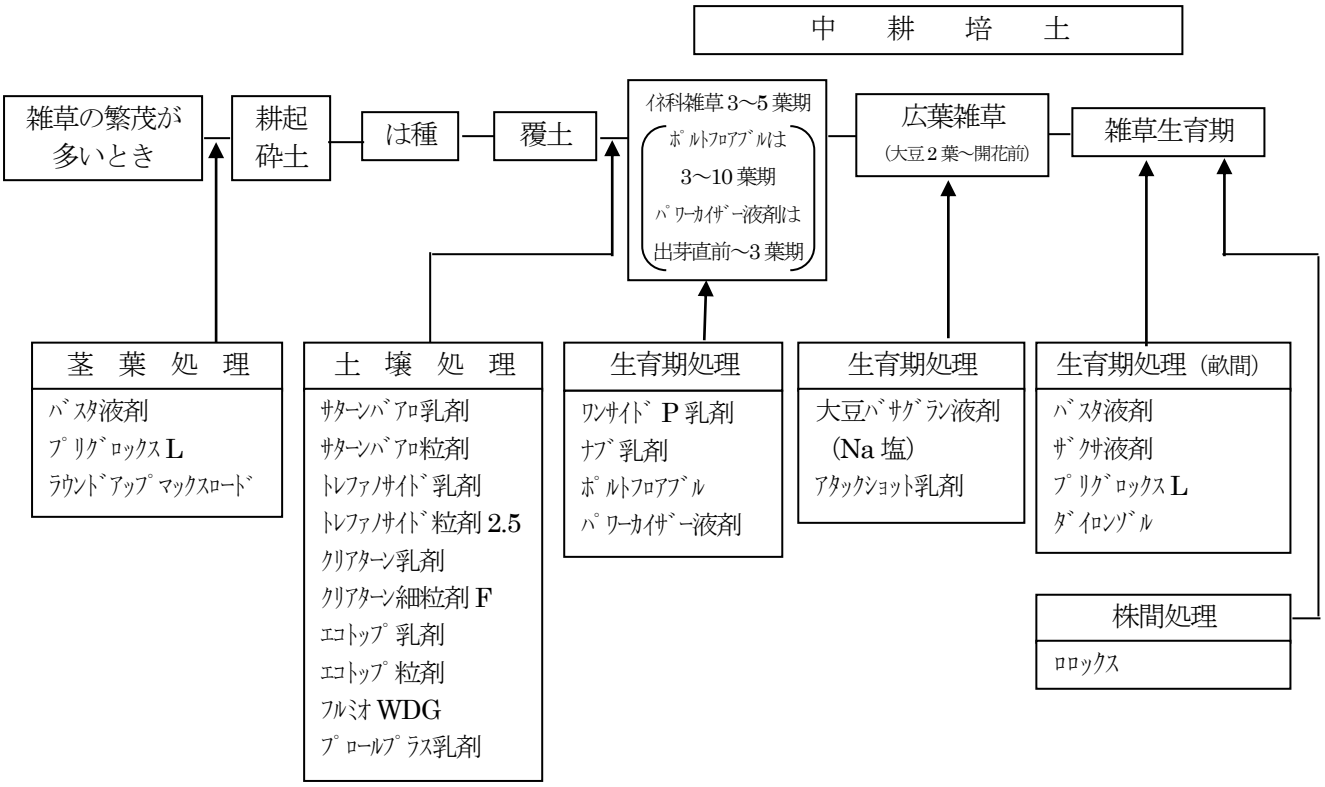
（７）除草剤体系　（例）

①　大麦の除草



・サターンバアロ乳剤・粒剤とクリアターン乳剤・細粒剤Ｆは、いずれか一つを１回だけ使用できる。
・クリアターン乳剤・細粒剤Ｆとムギレンジャー乳剤、キックボクサー細粒剤Ｆは、いずれか一つを１回だけ使用できる。
・ガレース乳剤・Ｇとバンバン乳剤・細粒剤Ｆとリベレーター Ｇ・フロアブルは、いずれか一つを１回だけ使用できる。
・ハーモニー細粒剤Ｆとハーモニー７５ＤＦ水和剤は、いずれか一つを１回だけ使用できる。
・早まきは、温暖なため雑草の出芽や再生にも好適なことから、雑草が多発しやすい。
・春、雑草が目立ってからでは除草できないので、越冬前の除草に努める。

②　だいずの除草



・生育期処理の除草剤は、使用できる時期（収穫前日数）に制限があるので、処理の際に注意する。
・だいずの生育量を確保し、抑草効果を高める。
・排水対策の徹底に努め、砕土、は種、覆土を丁寧に行い、特にだいずの出芽および初期生育を促す。
・中耕・砕土を早めに丁寧に実施し、雑草の小さいうちに確実に覆う。
・収穫期に残った大きな雑草は、コンバイン収穫すると汚損粒の原因となるので、手で抜き取る。